

ニワトリの獣医師と呼ばれて7

～一命懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

友人の死に直面して

「S(友人)が交通事故で昨夜死んだ。通夜は明日の夜だそうだ」

その日の早朝、友人からの一本の電話で叩き起こされた。大学一年の総締め括りである期末試験がやっと終わった次の朝のことである。

「えっ！」

筆者は、あまりの突然の出来事に事態を把握できない。

「とにかく、これからのことを相談するために集まろう」

大学入学後の一年半は、いわゆる専門科目でなく、一般教養として高校の延長のような講義を受ける。様々な講義の試験を受け、一定以上の単位を取らなければ進級できない。各々の講義には、それぞれ試験があり、試験期間は延々二週間にも及ぶ。だから、いつもは不真面目な大学生も、辻褄を合わせに、この時ばかりは必死になる。仲間たちと連絡を密にし試験の予想問題等の情報を集める。時には徹夜もする。

一夜漬けの毎日の連続で疲労も最高潮。したがって、すべての試験が終了した日には体全体が開放感で包

まれる。そんな精神状態の日に事故は起こったのだ。

筆者は、仲間と待ち合わせして直ちに、彼の家に向かった。葬儀が行われる通夜会場となっている彼の家に到着し、言葉もなくご家族へあいさつをした後、変わり果てた友と対面した。遺体の脇では、ご遺族の方々のすすり泣く声が聞こえる。筆者は、冷たく硬くなった友を見て、頭の中が真っ白になった。

「信じられない」

筆者は、溢れ出る涙を止めることができなかった。

あとから友人に聞いた話だが、事故直後の晩に何も知らない友人は偶然にも一人住まいの彼のアパートを訪問したとのこと。そこには、何人もの警察官がアパートの部屋や周辺におり、知人だと告げると、死体の本人確認をしてほしいと依頼されたという。

本人確認に立ち会った友人は、朱に染まった事故直後の生々しい友の姿を見た衝撃は、獣医師となって数々の『死』と向き合った経験を持

った今でも、忘れることができないという。

それからの数日間、筆者は何も手がかからない。もちろん、筆者の心は、「友人の死を悲しむ」という感情が占めていた。

が、しかし、その感情と同時に彼の遺体を見て、「死後硬直(生き物の死後、体温が下がって体が硬直すること)が起こっている」という科学的な視点で、冷静に起きた事象を捉えている自分にも気づき、自己嫌悪に陥った。

このとき初めて、これから獣医師としての仕事を選ぶということは、数え切れない程の『死』に直面しなければならぬ、ということであるという現実を認識させられた。

今までは、「ニワトリの獣医師になつて、業界で役立ちたい、活躍したい」といったような希望に満ちた部分しか見えていなかったわけだ。しかし、忽然と負の現実がクローズアップされショックで愕然とした。頭の中ではほんやりとは覚悟していたつもりであったのだが……。

タイトルは忘れたが、筆者は人間味あふれた医師の物語を読んだことがある。この物語では、医学部に入

つた主人公がまず言われたこととして「感情を捨てろ」というくだりがある。すなわち人間をタンパク質のかたまりと見ろということなのだ。

この言葉に対する批判も当然あるかもしれないが「生き物をタンパク質のかたまりとして客観的に見る」からこそ、病気の根本が理解し得るといえる。自分自身生き物でありながら、「死」すなわち生命の終わりを

最初の試練・解剖実習!

獣医師だけでなく、医師、あるいは看護師といった医療分野を学ぶ者にとって最初の試練が、「解剖実習」であろう。

こうした技術や理論を学ぶにあたって「生き物の犠牲」が必要となる。わが獣医学科を、多くの学生は「生き物を助けたい」と思って志望している。しかし、解剖学は生体の異常を発見する基礎として、まず正常な生体の構造(成り立ち)を知るための学問だ。言うまでもなく解剖実習に供される動物というのは、全く健康な個体ということになる。

「生き物を助けたい!」と違って獣医学科に来ているのに、健康な動

物を客観的に捉えなければならぬという宿命は、いつか自分の気持ちの中で超えなければ先に進めないものなのである。

自己嫌悪を含めて、友が亡くなった時に感じた気持ちは、結局は「時」が解決してくれた。

しかし、(この種の葛藤は生きていく限り、常に自分自身につきまとうものらしい)と今も思われる。

物を殺さなければならぬ。本来のエモーションと実際にとらねばならない行動は逆となる。助けるどころか、学生たちは健康な動物の犠牲を踏み台にしなければならぬ。自分たちのために、助けたかった動物が「犠牲」になるのだ。

さらには、この「犠牲」は、獣医師になつてからも必要となる。現場での数々の犠牲が、様々な経験として我々獣医師の血肉になるのである。(最近では、動物福祉の面から必要最小限の犠牲で済ませることが求められている、という。それで十分な学習効果上がるものだろうか?) このカルチャーショックを自分な

りに消化することは結構な試練といえる。まして、「子供の頃に大切にしていた犬や猫が死んでかわいそうだったから、獣医師になりたい」といったことが獣医学科に来ている動機となっている女子学生も結構多かったから、なおさらだ。

最初の解剖実習は、お料理教室のような雰囲気が始まった。先生方が、そんな女学生たちに配慮したのであるか? 当日実習室に行くと、先生の机の上には、学生の数分の肉塊が置いてあった。

「ハイ、それでは、各自机の上からこれ(肉の塊)を持って行くように!」と肉塊を指し示すS教授。

「何だ? これは!」

「七面鳥じゃないか?」

「違うよ。ニワトリだよ」と騒ぐ級友たち。

最初の解剖実習の検体は、ニワトリであった。しかし、検体の状況はローストチキンにされる前の姿といえば、おわかり頂けるだろうか。

「この部位、砂肝って言うのだから」「ササミを下宿に持って帰っていいですか?」

「オレ、卵巣が大好きなんだよ」と、あとで食えることばかり考えて

いる級友たち。「これって、何か違うような気がする」

筆者は、養鶏場でドクターKが真剣な眼差しでブラックジャックのように解剖している姿を遠くで拝見していた子供の頃の記憶を思い出し、その光景とのあまりのギャップに嘔然としてしまった。子供の頃を感じた神聖な何かを土足で踏まれた気がしたものだ。

初めて経験したニワトリの解剖実習は肩透かしにあったが、さすがにウシ、ヤギ、ウマ、ブタなどの大動物の解剖は、筆者自身経験がなかったせいか、神聖な気持ちとショックが複雑に入り混じった経験となった。動物を解剖に供するために殺処分する場面は、何度立ち会ってもそう簡単にショックを超えられない。

実習でウシ・ウマのような大型の家畜を安楽死させる時は、筋弛緩剤(筋肉を緩める作用をもつ薬剤)を用いる。筋肉注射すると同時に、六〇〇キロ近い巨体が突然ドスンと倒れる。あまりの反応の早さに、当初は何が起きたのか理解できないほどだった。(筋弛緩剤の機序は、全身のすべての筋肉が一度に緩むため、

呼吸もできなくなり、急速に死に至る、というものである。

「生き物の死とはこんなにあつけないものなのか……」

動物が死ぬ時、獣医師のタマゴたちは動物たちが犠牲となるその瞬間に最後の力を振り絞って上げる声を聞く。その時、学生たちは目に涙を溜め、溢れるのを必死に堪えながら、自分たちのために犠牲になった動物

血を見るのは苦手だ

大学に入る頃までには、ニワトリに関しては、かなりの免疫ができていた筆者だったが、本当は血を見ると蒼ざめて全身の力が抜けてしまうほど気が弱い少年だった(今でも人間の血は苦手だ)。

少年時代は、採卵養鶏場の育雛・育成舎でヒヨコと一緒に育ったような筆者であつたことは以前紹介した。嫌々ながら家の仕事を手伝う中で、抵抗のない作業とどうしても苦手なものがあつた。苦手な仕事の筆頭は、オスヒナの淘汰である。

採卵養鶏場にはタマゴを産まない、つまり経済的にペイしないオスは不要だ(筆者は経済動物でない人

たちに報いようと心に誓うのである)。

動物が息を引き取ると、ついさつきまで生きていた動物が、物体として見え、黙々と体の構造を学ぶ。こうした経験を積み重ねていくうちに、学生たちは生き物に対して客観的に見ることができるようになるのである。一般の方々には到底理解できないことかもしれないが……。

間でもよかつた。業界に縁のない人々はあまり深く考えたことはないだろうが、採卵養鶏場にオスのニワトリはいないはずである。産まれたばかりのヒヨコは雌雄鑑別されて、メスのヒヨコばかりが育雛舎に運ばれる。(オスはどうなるのだろうか? 冷静に考えれば、お祭りの夜店にでるぐらいじゃ、とてもオスのヒヨコを処分しきれないはずだ)

したがって、育雛場にはメスのヒヨコしか来ないはずだが、鑑別師もロボットのよう完璧ではないので、ミスもある。一定の割合で出る誤鑑別である。

餌付けしてから二十〜三十日も経

過すると、トサカの発達度合いで、雌雄の判断がつくようになる。慣れば、子供でもわかる。

言うまでもなく、オスはメスよりよく食べる。おまけに将来タマゴを産まないのだからお金にはならない。お金にならないどころか、損だ。ということ、筆者は父に「一敏、オスを見つけたら直ぐ淘汰しろ!」といつも口酸っぱく言われていた。

しかし、淘汰とは殺すことである。当時、非常に気弱だった筆者にはとてもできない(生き物を殺すことが、平気な方が異常だと今でも思うが、いかがなものだろうか?)。

もう一つの苦痛な作業は、鶏痘ワクチンの接種であつた。血を見るのが苦手であつた筆者にはこの作業は精神的に苦痛であつた。

このワクチン作業を経験したことのある方は、容易に想像できると思うが、鶏痘ワクチン・シオンは穿刺という原始的な接種方法で行う。

原始的というのは、他のワクチンはピストル型の連続注射器で脚部や胸部の筋肉に注射するのであるが、今でも穿刺針を使って羽根の翼膜に接種する方法を採用する場合が多い。(鶏痘ワクチンにもピストル型

の接種器も存在するのではあるが)

具体的には、小さな溝が彫つてある穿刺針を鶏痘ワクチンの溶液に浸し、ニワトリの翼膜に一羽一羽刺すことよつて、溝に溜まつたワクチン液を傷口に接種する、というものだ。筆者が父を手伝つていた頃は、父はケージから引きずり出したニワトリの片足を一〇羽ほど束ねて左手で保持する。残つた手で一羽ずつの羽根を広げる。広げると同時に、筆者はワクチンをつけた穿刺針を翼膜にめがけて一気に突き刺す、という按配である。

翼膜に接種する際には、血管、骨などが無い部分を目掛けて刺さなければならぬ。しかし、連続して実施していると、人間誰でも目立つところを目印にしてしまいがちなものである。自然に赤い血管が目印となり血管を突き刺してしまう。血管に穿刺針が刺さると、当然血が大量に出る。酷い時には、大量に噴出し鶏舎の床にポタポタと血が滴るのだ。こんな状態になると、筆者は全身の力が抜け、顔面蒼白となつてしまう。全身の力が抜け呆然としている筆者に父の罵声が飛ぶ。

「一敏、何をやってるのだ!!」

早くしろ！」

「ハ、ハイ」

こんな様子で元来血が苦手なことに加えて、父に怒鳴られたことがオパーラップして今でもイヤな思い出となっている。

ところで少し話は脱線するが、実はこの鶏痘というニワトリの伝染病は、天然痘という医学の進歩に大きく関与した伝染病と親戚関係にあることはご存じであろうか。

筆者が読んだ本（『好きになる免疫学』・萩原清文著／講談社サイエンスティフィック）に、天然痘という伝染病は、一六三二年にピサロというスペインの国王がインカ帝国を滅ぼす道具として使った伝染病だったと記載されている。さしずめ、現代で言えば、生物兵器といったところだ。米国のブッシュ大統領は、イラクが生物兵器を保有・使用するのを恐れて、先制攻撃をした。イラクが保有したとされる生物兵器に用いた病原体を筆者は知らないが、天然痘は十七世紀に一国を滅ぼそうとして用いられたのだから、どれくらい恐ろしい伝染病であるかが容易に想像できるだろう。

この恐ろしい伝染病である天然痘

を予防しようとしたのが、かの有名なエドワード・ジェンナー（一七四九—一八二三）という研究者である。

十八世紀のこと、彼は牛痘にかかった牛に接していた乳絞りの女性たちが、何故か天然痘感染から免れていたことに目をつけた。

『天然痘も牛痘も似たようなものだ。彼女たちは牛痘にかかることによつて、軽く天然痘を経験したことになるのではないか！ 感染の経路は済みだから、ヒトの天然痘にかからないのだから』

という仮説を立てた。そして、自分の子供に対してその乳搾りの女性の腕にある牛痘の膿を接種した。接種部位には、軽いカサブタが形成され、その後回復した。この子は牛痘感染の回復後に、人の天然痘で攻撃されても感染から免れることができた。

これが、世に言う『ジェンナーの種痘』と言われるものである。

十九世紀末、ジェンナーの種痘で確立された概念を、さらに発展させたのが、レイ・パスツール（一八二二—一八九五）という研究者である。読者の皆さんは、ジェンナーという名前よりもパスツールという名の方

に馴染みが深いかもしれない。

彼は、人為的に弱くした病原微生物を注射し、ワクチネーションとして伝染病を予防する方法を開発したのである。この予防法は、パスツールがこのジェンナーに敬意を表して、牡牛（Vaca）に由来するワクチン（Vaccine）療法と名づけられたそうである。

医学のみならず近代養鶏において、重要な役割を担っているワクチンには、こんなルーツ（起源）があり、それが、鶏痘という代表的なニワトリの伝染病と繋がりがあつたのだと考えると面白いかもしれない。

人間に限らず、世の中に存在するすべてのものは、様々なルーツ（起源）の上に成り立っている。そんなルーツを辿っていくことも、あるいは将来へ繋げていくことも最近の筆者の楽しみである。

当時、鶏痘のそんなルーツを少しでも知っていれば、苦痛だったワクチン作業も少しは楽しくなったかもしれない。

イヤ、そんなわけないか。

（筆者・楳）ピーキーシュー品
質管理&生産管理部門長／獣医学博士／獣医師